

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00283

研究課題名(和文) 神経発達症群の支援を有機的に構成する専門職の資質能力と社会的機能に関する研究

研究課題名(英文) The research on qualities and social functioning of the professionals consisting organic supports for the individuals with neurodevelopmental disorders

研究代表者

小野 尚香 (NAOKA, ONO)

日本福祉大学・福祉経営学部・教授

研究者番号：70373123

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：各国で神経発達症群の範疇にある子どもと保護者に対する支援が展開されてきた。その中でも、スウェーデンにおける支援組織Bryggan(橋)の20年間の活動を通して、専門職の資質能力とその社会的機能について検討した。

現在もテキストマイニング法を用いた分析を継続しているが、これまでの研究成果から、多職種連携によるアプローチ、Bryggan内外の研修、保護者との信頼関係と独自の保護者教育マニュアル作成、幼児に対する縦軸(小学校一年生まで)の継続支援と横軸(地域における教育・医療・保健・福祉機関との連携)のネットワークを構築し、診断の有無に関わらず、発達課題のある子どもに対する早期支援体制を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スウェーデンにおける神経発達症群に関わる支援チームBrygganの20年にわたる活動を通して、子どもに対する継続的支援ならびに地域での保健・医療・教育との連携の有用性について示した。一方、Brygganスタッフ研修、保護者支援マニュアルの作成、関係機関とのカンファレンスや専門職研修は質の高い支援を生み出し、高い外部評価を得た。管轄地域の約10%の子どもがBrygganを通過した年もあり、その結果、小学校での問題と病院での受診待機期間が減少した。

以上の効果的な取り組みは日本における教育・福祉現場や医療的支援の在り方に示唆を与えるものであり、学会や論文発表、また専門職研修等によって紹介した。

研究成果の概要(英文)：Support has been developed in each country for children and their parents in the category of neurodevelopmental disorders. In particular, through the 20 years of activities of the support organization Bryggan (bridges) in Sweden, we examined the qualities and abilities of professionals and their social functions.

We are still analyzing using the text mining method. Based on the results of our research so far, we found a multidisciplinary approach, training inside and outside Bryggan, a relationship of trust with parents and the creation of our own parent education manual, continuous support for young children (up to the first grade of elementary school) and a network of horizontal axis (cooperation with educational, medical, health-care, and welfare institutions in the region), regardless of whether or not there is a diagnosis. An early support system for children with developmental issues was presented.

研究分野：科学社会学および科学技術史関連

キーワード：神経発達症群 支援システム 幼児支援 保護者支援 専門職養成 スウェーデン

1. 研究開始当初の背景

神経発達症群の範疇にある子どもと保護者の支援について、スウェーデン研究においては、2007年から、ストックホルムをはじめ8都市をフィールドとして広く調査をすすめ、医学的知見や障害観の変化とともに、地域での保健・教育・福祉システムとのダイナミクスについて研究をすすめてきた。スウェーデンの各市で、医学的知見を基底としながらも、地域の人的ならびに社会的資源を活かした、地方固有の組織化された支援システムがみられた。共通する要素のひとつに、子どもと保護者のニーズをとらえて寄り添い、障害或いは類似した子どもの状態に対応できる知識と技術を習得した専門職の資質能力がある。それは、日本における指導と支援を担う専門職養成/研修の内容に大きな示唆を与える。

その一方で、近代という時代に限っても、障害観や神経発達症群をめぐる理解も変化し、それに基づく支援のパラダイムもシフトしてきた。2001年WHOによるICF(国際生活機能分類)が示した「生きることの困難さ(障害)」に対する理解と支援の考え方は、医学モデルとともに環境との相互作用によって作られる生活機能の「障害」を社会モデルとして提示した。2006年の国連総会採択の「障害者の権利に関する条約」において、共生社会を目指した具体的提案がなされた。スウェーデンにおいても、WHOの考え方や国連が掲げる条約は障害に対する理解や支援の指針となっており、2008年に「差別禁止法」、そして2019年には、「児童の権利に関する条約(1989年国連総会採択)」が国内法となった。スウェーデンでそして日本で、共生社会を目指し、子ども時代から格差がなく「公平」であることの重要性が掲げられている。医学面では、2013年にDSM-5(精神疾患の診断と統計マニュアル第5版)が発表された。

本研究では、スウェーデンでの取り組みの中でも、外部評価の高い活動を継続し、ウプサラVITS等の他の自治体の施策にも影響を与えたスウェーデンのイエブレ市(人口10万)ならびにサンドビッケン市(人口3万)における神経発達症群あるいはそれに類する幼児と保護者への支援組織であるBrygganに目が留まり、その組織と活動内容、専門職の役割とその資質能力の向上、専門職による社会(形成)機能、さらに利用者(子どもと保護者)のニーズと支援による変化に関心を抱いた。

2. 研究の目的(当初)

上記1でも述べたが、スウェーデンのイエブレ市ならびにサンドビッケン市における神経発達症群あるいはそれに類する幼児と保護者への支援に注目し、その支援組織であるBrygganのシステムを研究調査対象とし、1996年の発足当時から現在に至る、組織化、活動内容、専門性の育成・維持・向上のためのBryggan内外の専門職研修、地域における医療・保健・教育との連携を整理し、Brygganの専門職と保護者に対するインタビュー調査を基に、専門職に求められる資質能力を構成する要素、さらに社会(形成)機能を明らかにすることを目的とした。

具体的には、次の4点を念頭に置いた。

医学的知見の動向と、医学的知見を基底とした支援と、医学的に判断される支援の効果について。特に、2012年に発表されたESSENCE(Early Symptomatic Syndromes Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations)や2013年のDSM-5(アメリカ精神医学会による精神障害の診断と統計マニュアル第5版)は、子どもの暮らし全体を見る視座を示し、Brygganはその影響を受けていた。

有用な支援の目的と方法を構造的に分析すること。Brygganの活動が他の自治体の施策の参考となったこと、年度によっては、4~5歳児の約10%がBrygganを通過し、医療機関での待ち時間の減少にもつながったことや小学校スタートを容易にさせたことなど、プラクティカルな指針と支援方法に注目する。

Brygganによる専門職の資質能力向上とそれを担保する方法。地域の専門職に対する研修や合同会議、保育・教育現場での巡回指導、コンサルテーション、カンファレンスの有用性。

Brygganの活動の社会的影響について。地域の一般の人びとへの啓発活動をとおして神経発達症に対する理解の広がり、またBrygganが有している地域ネットワーク機能の効果、例えば、保育・教育現場の神経発達症(特に自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症)の子どもに関わる指導が保育士・教員の理解と適切な指導方法につながり、その保育士・教員の子どもに対する接し方を目にした同世代の子どもへの共生することへの影響。

以上から、2つのBrygganの活動を経年的に分析することによって、神経発達症群に対する外部評価の高い有用な支援を構成する要素が、どのようなファクターと強い相関

関係にあるかを検証し、一つの支援モデルとして示す。

3. 研究の方法（当初）

Bryggan 発足当時 1996 年からの暦年資料ならびに外部評価や行政の関連資料、新聞記事等の収集と翻訳整理、現地での参与観察、ならびに専門職と保護者に対するインタビュー調査によって行う。テキストマイニングによる分析や、年次報告書の翻訳と整理を進めた。

神経発達症群の医学の知見については、DSM - 5 の診断基準ならびに ESSENCE、治療、疫学調査を参考とする。Bryggan チームによる設定課題と支援方法さらに障害観については、ICF（国際生活機能分類）の考え方に基づいて把握する。

Bryggan の専門職に対するインタビュー調査では、支援プログラム（親トレーニング等）の開発、子どもと保護者に対する関わり方、各専門職（医師、看護師、作業療法士、理学療法士、心理師、特別支援教育指導教員）の役割、多職種連携等を対象とする。保護者に対しては、障害受容や Bryggan 支援による子どもの変化、親子関係の変化、親の気持ちの変化等を対象とする。

Bryggan の専門職（保育士、教員、保健師、学校看護師、医療専門職等）研修やコンサルテーション、カンファレンスの内容による保育士・教員への影響、また、地域ネットワークを活用した保育・教育の場における巡回指導を対象とする。

地域の専門職や機関との連携や影響について、年次報告等や行政資料を用いて、Bryggan の社会的機能（役割や働き）を整理する。

以上のように、Bryggan の活動の足跡を文書資料、専門スタッフに対するインタビュー調査により経年的に整理分析し、また、保護者に対するインタビュー調査も合わせて、社会的役割を検討する。

4. 研究成果

COVID-19 感染症蔓延のため、スウェーデンへの渡航が難しく、予定していたスウェーデンにおける現地調査は 2023 年 2 月の 1 回のみであった。予定を変更して、インタビュー調査については Zoom を用いたオンラインでの方法に変更し、了解を得た Bryggan スタッフである医師と看護師兼コーディネーターに対して行うことができた。

また、Bryggan スタッフの協力を得て、Bryggan に関する 25 年間に掲載された新聞記事（30 本）、年次報告、外部評価資料、Bryggan スタッフ（理学療法士）による地域での専門職研修の資料、開発した親教育プログラム、該当地区とくにサンドビッケンの施策に関する広報誌等を入手し、その一部を翻訳し発表した。下記、年度ごとに研究成果を振り返る。

2020 年度の成果は以下の 3 点である。1994 年以降、現在の Bryggan の出発点であるリソースセンターとしての活動と活動趣旨が記された 1996 年 Arbetarbladet 新聞に掲載された記事について翻訳し、学会地方誌に掲載された。その内容は、Bryggan がモデル事業としてスタートした動機や神経発達症をめぐる社会の問題（医療受診の為に長時間の待機時間、学校での行動問題、保護者の苦悩等）を指摘したものであった。また、この記事の翻訳については、Bryggan の創設者である医師とメールやオンラインでやり取りをして、その内容と意識に対する確認を行った。現在の Bryggan の活動の枠組みと社会的機能についてまとめた「スウェーデンにおける神経発達障害医療～地域に根差した幼児期における支援システム」と題して、学会誌に掲載された。この内容は、Bryggan スタッフに対するインタビュー調査を基にしたものである。Bryggan の活動の前段階にある行政サービスとしての小児保健センターにおけるチャイルドヘルスプログラムに注目し、スウェーデン政府がインターネットでアクセスできる形で公開しているプログラムやガイダンスを参考に、乳児期並びに幼児期の精神運動発達に関わるチェックリストとフォローアップの要点を整理し、「乳児期の精神運動発達の評価との特徴～スウェーデン “Barnhälsöversynsprogrammet” から～」「幼児期の精神運動発達の評価と特徴～スウェーデン “Barnhälsöversynsprogrammet” から～」と題して、学会地方誌に掲載された。“Barnhälsöversynsprogrammet” はナショナルプログラムであり、全国で実施されている。この内容から、小児保健センターで発達課題があり、その二次的フォローアップとして、Bryggan の重要性を垣間見ることができた。

インタビューについては、オンラインでのインタビューに躊躇する専門職や保護者がおり、承諾を得た Bryggan の医師と看護師兼コーディネーター 2 名のみとの頻回なやり取りに終始したが、本年度は、Bryggan の活動をめぐる多くの資料を入手でき、それを翻訳することによって、Bryggan 活動の推移と全体像が見え始めた。また、保育士・教員研修、行政機関への助言等の機会に、Bryggan の実践（自閉スペクトラム症に対する理解と支援、保健、福祉、教育のマトリックス型支援等）を紹介した。

2021 年度も、COVID-19 感染症蔓延によりスウェーデンでの現地調査を行うことができなかった。その代わりとして、先年度に続いて、資料収集と、オンラインによるインタビュー

調査に重きを置いた。具体的には、Brygganの活動を経年的に整理し、専門職の資質能力に関してBrygganの専門職にインタビューを行い、保護者に対するインタビューの段取り(質問内容、倫理申請など)を整えた。保護者に関しては、オンラインのため、2019年に行った2名の他にBryggan利用者の協力を得ることが難しく、業者に依頼し、研究の趣旨と倫理事項を添えて広く一般募集を行った。保護者に対するインタビューも、オンラインでの了解を得て8名(7名は保護者、1名は保護者であり支援者)が確保でき、書類のやり取りをしながら、また倫理申請の結果を待ちながら段取りを進めた。

Brygganスタッフとしては、医師、看護師兼コーディネーターに対して、オンラインでインタビューを合計10回予定し、その内、5回(医師:2時間×3回、看護師:2時間×2回)を実施した。また二人には、資料翻訳の際に意味するところについて質疑応答の許可を得た。

Brygganでの活動は、子ども支援や親支援にとどまらず、Bryggan組織内の専門職の研修によって支援する者の資質能力の向上を図り、さらに地域の専門職や行政官や政治家への啓発活動、地域における一般大衆向けの公開講座も企画された。

2021年度に、この研究において遂行できたこと並びに成果として、収集した資料は、1994年と2003年の新聞記事、2012年のBryggan活動に対する外部評価文書ならびに2013年～2020年までの関わる年次報告であり、それらの翻訳および整理を行った。Bryggan活動開始前の1994年の新聞記事には、Brygganを主導する医師と看護師による神経発達症群の範疇にある子どもたちの現状についての問題点や両者の思いが記されている。また、活動開始後7年後の2003年の新聞記事には、Brygganが多職種連携により、地域の保健・教育機関と連携し、幼児期後期を対象として包括的支援を進めてきた経緯が示されている。2本の「報告」と1本の「研究ノート」が学会地方誌と大学紀要に掲載された。保護者支援については、Brygganでの方法を日本に活用して、6本のエッセイを記し発表した。

2022年度においても、COVID-19感染症蔓延状況が続いていたが、2023年2月には渡瑞し、Brygganに対する現地での調査を進めることができた。現地で医師と看護師兼コーディネーターにBrygganの現状について直接インタビューができ、またBrygganと連携する地域の小児保健センターの専門職に対してインタビュー調査も行った。現地での対面調査では、オンラインでは得られなかった臨場感あふれる事例や、インターネットや添付ファイルでは得ることができない資料の収集が可能となった。現在、現地で得たインタビュー調査についてはテープ起こしと翻訳を、資料についても翻訳を進めている。

一方で、オンラインによるインタビュー調査を継続した。予定していた他のBrygganスタッフである特別支援教育指導教員、心理師、作業療法士、ソーシャルワーカーは、オンラインでのインタビューは不可能であったが、医師と看護師兼コーディネーターに対しては、昨年度に追加して、医師は2時間×1回、看護師兼コーディネーターは2時間×6回の半構造化面接を行うことができた。これらのインタビュー調査を通して、活動、組織の変化、経済面、Bryggan来訪者(受診者)の動向、専門職研修にわたって詳細な内容を聞き取ることができ、今年度は特に専門職の資質能力向上に向けた取り組みと、保護者のニーズについて調査が可能となった。現地調査で、二人のBrygganスタッフに会い、新しい資料を入手することができ、活動の詳細を確認することができた。

今年度、この研究の成果は次のとおりである。Brygganを主導する医師と看護師兼コーディネーター、関連する小児保健センターでの専門職に対するインタビュー調査を通して、地域におけるBrygganの位置づけと役割を把握し、この20年のBryggan組織、目的並びに活動の変化、財政状況、専門職養成としてのスタッフ研修の枠組みについて理解を深めることができた。一方、Brygganの支援を受ける保護者についても、現地対面でのインタビューに対する了解を得ていたが、オンラインによる調査については不可能であったため(2019年に2名のみ行ったが)、神経発達症群の範疇にある子どもと保護者のニーズを少しでも把握するために、Bryggan以外に範囲を広げて業者を通してオープンに募集を行い、Bryggan以外の保護者の協力を得て、神経発達症(Brygganの対象で多い、自閉スペクトラム症ならびに注意欠如・多動症等)と診断された子どもの保護者7名(子ども10名)の障害受容や必要な支援、また有用であった支援を把握するために半構造化面接を行った(倫理申請済み)。

以上の成果として、資料収集と翻訳作業:昨年度入手した資料(新聞記事と外部評価報告、2014年次報告と教育的マッピング)を翻訳し、学会地方誌に2本掲載された。また、現地調査やオンライン調査で、Brygganスタッフから得た新しい資料(年次報告、外部評価、研修資料、行政資料等)ならびにインタビュー内容について、翻訳作業を進めている。それらは、Brygganの活動を経年的に整理し、Brygganが専門職に求めた資質能力を把握する助けとなっている。以上により、医療・保健・教育の多職種連携による、幼児期後期を対象とした包括的支援の様相がより明らかとなった。

2023年度は、本研究のまとめに努めた。引き続き、神経発達症群の範疇にある幼児と保護者の支援組織であるBrygganの医師と看護師兼コーディネーターに対するメール並びにオンラインでの補足調査を行った。並行して、広域自治体と基礎自治体に提出するBryggan

の年次報告書と、専門職研修の内容を翻訳した。Bryggan の活動を通して、Bryggan の活動自体が多職種（医師、看護師、心理師、作業療法士、理学療法士等）連携によって行われていること、幼児期を通して 小学校入学後一年間という期間の子どもに対する経年的支援（縦軸の支援）と、各時期における地域の保健（小児保健センター）、教育（就学前学校～小学校）、医療（児童期青年期精神診療所、ハビリテーションセンター等）の各専門職と連携する横軸の支援を構築していることが明らかとなった。

年次報告と Bryggan のスタッフである作業療法士による研修内容を翻訳し、学会地方誌に 2 本掲載され、また学会研究集会で発表した。

その一方で、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症と診断された子どもの 7 名の保護者に対するオンラインでのインタビュー内容を整理し、テープ起こし並びに翻訳を行った。現在、専門職と保護者に分けて、インタビュー内容をテキストマイニング法によって解析中である。専門職については外部評価の高い Bryggan 活動の構成要素 について、保護者に対しては、保護者が認識する子どもの状態、受けた支援や親の気持ちについて明らかにすることを目指している。

以上、本研究を通して、スウェーデンのイエブレ市ならびにサンドビッケン市における神経発達症群あるいはそれに類する幼児と親への支援組織 Bryggan の発足趣旨から約 25 年にわたる活動経緯を整理し、特にその組織化、活動内容、その基底となった医学的知見の変化、Bryggan の専門職の専門性の向上や資質能力や地域連携、保護者のニーズについて把握することができ、神経発達症群の子どもに対する有用な支援の在り方を示してきた。

Bryggan スタッフに対するインタビューならびに保護者に対するインタビューは分析中であるが、支援側の意識や Bryggan 全体の活動を成す要素、保護者については、保護者が認識する子どもの状態や、保護者の支援に対するニーズについて明らかにして、支援のひとつのモデルを示したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 115
2. 論文標題 スウェーデンにおける神経発達症支援の濫觴期 ~ Har tas barnen pa allvar 1998 ~	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 醫譚	6. 最初と最後の頁 10303 - 10314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 116
2. 論文標題 資料：スウェーデンにおける発達障害児支援組織Brygganに対するKonsult rapport 2012	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 醫譚	6. 最初と最後の頁 10591 - 10604
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 114
2. 論文標題 発達障害のある子どものための「架け橋」プロジェクト : En brygga for dampbarnen二〇〇三.九.十二.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 醫譚	6. 最初と最後の頁 10147 - 10157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 113
2. 論文標題 Damp-barn far hjelp i Sandviken : Sandviken市における「発達障害」のある子どもに対する支援システムの揺籃期	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 醫譚	6. 最初と最後の頁 9947 - 9955
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 97
2. 論文標題 連載：保護者の思いに寄り添って～障がいのある子どもの保護者への支援～ 第1回 子どもの心に気づいたときから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルドネットOSAKA	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 98
2. 論文標題 連載：保護者の思いに寄り添って～障がいのある子どもの保護者への支援～ 第2回 援助に際して"の大切な態度	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルドネットOSAKA	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 99
2. 論文標題 連載：保護者の思いに寄り添って～障がいのある子どもの保護者への支援～ 第3回「自己決定」のプロセスにより沿う	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルドネットOSAKA	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 100
2. 論文標題 連載：保護者の思いに寄り添って～障がいのある子どもの保護者への支援～ 第4回 言葉の届かない保護者に 思いを寄せて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルドネットOSAKA	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 101
2. 論文標題 連載：保護者の思いに寄り添って～障がいのある子どもの保護者への支援～ 第5回 個性を障がいにしないために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルドネットOSAKA	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 102
2. 論文標題 連載：保護者の思いに寄り添って～障がいのある子どもの保護者への支援～ 第6回 障がい受容を支える子どもの発達と適切な療育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルドネットOSAKA	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香、大久保賢一、稲本正法	4. 巻 17
2. 論文標題 京都府立癲狂院「癲狂院患者教則及ヒ工場（業）假規則」～「自立活動」ならびにICFの視座から読む～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 畿央大学紀要	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 128
2. 論文標題 乳児期の精神運動発達の評価とその特徴～スウェーデン"Barnhalsovardsprogrammet"から～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医譚	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 42
2. 論文標題 スウェーデンにおける神経発達障害医療：地域に根差した幼児期における支援システム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 出来麻有子、小野尚香	4. 巻 17
2. 論文標題 神経発達症群の範疇にある当事者の語りを通じた支援のあり方についてー先行研究論文からー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 畿央大学紀要	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 129
2. 論文標題 幼児期の精神運動発達の評価とその特徴～スウェーデン"Barnhälsovarsprogrammet"から～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医譚	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 135
2. 論文標題 スウェーデンにおける神経発達症支援組織Brygganの活動：2015～2017年次報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 医譚	6. 最初と最後の頁 113 131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚香	4. 巻 134
2. 論文標題 スウェーデンにおける神経発達症の支援組織Brygganの活動とその機能：協力協定、2014年次報告ならびに教育的マッピング	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 医譚	6. 最初と最後の頁 10773 10793
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小野尚香
2. 発表標題 スウェーデンにおける発達障害児支援組織Brigganとその評価
3. 学会等名 日本医史学会 関西支部 2022年度秋季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 出来麻有子、小野尚香
2. 発表標題 神経発達症群の範疇にある「当事者」に対する支援 - 先行研究論文から -
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野尚香
2. 発表標題 神経発達症支援組織Brygganの活動 2017 ~ 研修「運動能力の発達・向上に関する理学療法的な情報」~
3. 学会等名 日本医史学会 関西支部 2023年度秋季学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スウェーデン	Bryggan			